

詠む広場

毎日俳壇

小川 軽舟 選

西村 和子 選

井上 康明 選

片山由美子 選

白百合やパンツスーツの女学生

奈良市 大塚 裕子

△評▽パンツスーツでりりしく就職活動中の女学生。白百合に象徴される若い女性の姿も時代とともに変わっていく。

片陰は向う側なりバスを待つ

春日市 林田 久子

△評▽道の向こう側でバスを待つ列は涼しげでうらめしい。街の陰影がくっきりと描かれた。

累々と乾きし小石夏河原

盛岡市 福田 栄紀

麦秋や髪のはるのウィスキー

千葉市 石野 勤

静かなる満員電車梅雨深し

鎌倉市 小川 求

梅雨晴や町内会の溝掃除

奈良市 中島 和夫

大瓶の麦酒を並べ昭和の日

東京 鈴木 明治

雨音の二階あかるき柿若葉

久留米市 川北 敦子

万緑や倒木眠る神の池

姫路市 辰巳 擁子

草笛の聞こえて下校時間かな

葛城市 渡辺しん子

石段を駆け上がるかに夏の蝶

下野市 石井 光

△評▽夏のチョウの活気に満ちた激しい動きを描写し得た。チョウは四季折々見かける存在なので、季節によって本質を詠み分けたい。

橋脚の落書き濡らす走り梅雨

川越市 大野有之介

△評▽橋の下の不気味な光景が、いよいよ梅雨に入る季節感と響き合う。雨音が聞こえてくる。

通り出て娘待つ梅雨夕焼

大阪市 木挽 弘志

駄菓子屋の隅に父の日のコーナー

紀の川市 中島 走吟

からくりの貌に布かけ祭終ふ

弥富市 富田 範保

夏帽子選ぶ妻はや旅気分

東久留米市 矢作 輝

黒南風や止まったままの観覧車

倉敷市 行本 章允

これは庭これは町用夏帽子

米子市 永田富基子

更衣妻の支への在ればこそ

横浜市 斎藤 山葉

浅蜷より蟹に夢中ぞ潮干狩

西海市 まないっそう

恍惚の手を引きくるる茅の輪かな

浜松市 久野 茂樹

△評▽老いておぼつかなくなった人の手を引いて、茅の輪をくぐる。穏やかな晩年を願って、息子や娘が手を引くのだろう。

老鷹や安房の山脈尽きて海

鎌倉市 佐藤 紀子

△評▽房総半島の緑が尽きて太平洋が青々と広がり、老鷹が鳴く。老鷹は夏に鳴くウグイスの意。

初夏の風をつかみて赤子泣く

伊勢市 藤井 信弘

朝霧へ消えゆくザック遠野公

朝倉市 鳥井てんせき

今夜また夜遊びらしきなめくじり

横濱市 菅沼 葉二

向学のたゆまぬ歩み雲の峰

野田市 塩野谷慎吾

闘争心老いて失せざる羽拔鳥

須賀川市 伊豆 周治

夕星の爛爛とある早梅雨

唐津市 梶山 守

短夜の海鳴りに覚め妻の里

龍ヶ崎市の小宮 光司

九九復習ふ少年ふたり雲の峰

東京 伊藤 公一

夜行バス降りて洗顔明し

那須塩原市 谷口 弘

△評▽目的地に明け方到着するバスに乗ってきたのである。まず洗顔をして目を覚まし、気分もすっきり。実感がこもる一句だ。

みつ豆やどこで終へてもいい話

東京 渡邊 顯

△評▽もとより深刻な話をするような場所ではないが、中七・下五がたわいのなさを伝えて巧み。県境の杭まくなぎの只中に

大南風豊後水道ゆくフェリー

浜松市 野畑 明子

梅雨寒や夜の豚汁の具沢山

高知 渡辺 哲也

落し文亡き妻からの便りとも

志木市 谷村 康志

短夜の明けゆくころを微睡みぬ

いわき市 会沢 繁

大川に屋形船の灯夏夕べ

岡山市 竹原 廣子

夕焼の海に船影動かさる

池田市 高倉 明子

梅雨冷えの鉄階段のよく響く

桜井市 山本 椋士

梅雨冷えの鉄階段のよく響く

東京 吉田かずや

米川千嘉子 選

加藤 治郎 選

水原 紫苑 選

伊藤 一彦 選

振り向いて確かめるには遅すぎる空に半分吸い込まれる

形容詞ばかりの自販機があればぼくは迷わず切ないを押す

アマリス遠くではと傘をひろくあなたのうしろに群列がある

生命を生みたる海を生命と呼ぶことのしんとさびしき

△評▽死んで魂が空に昇ってゆく瞬間などを想像してみる。はっと気づくのだが遅い。

△評▽寺山修司の作品を想起した。自販機に怖い・つらい・切ないといった文字が並んでいる。夢の場面のようなものである。

△評▽アマリスとあなたと群列の3者が絶妙のバランスで見えない空間を現前させている。幻ではなく、現実の奥の詩的現実。

△評▽豊かな生命を多く誕生させた海。それなのに人間はそのことをわかっていない。結句の深い嘆きの表現が見事だ。

近くて遠い雨 染野太朗

うたは奏でる

今年の梅雨明けはいつごろだろう。これを書いている今は、網戸の向こうで強い雨が降っている。

雨はたやすく私たちを濡らす。その源である雲は遠く、また、そもそもほんの数分先の雨粒でさえ、はっきりと見ることは難しい。それから、私たちが安らぎを得たり不安を煽られたりする雨音は、実際は雨そのものの音ではなく、雨粒が別の何かにつかかったときの音である。近さと遠さ。直接と間接。そのようなところが相反するものを内包して、雨は降る。いや、これは風や日の光にも言えることではあるのだが。

この雨は西からゆつくりやってくる。自転車でまた濡れて帰りぬ。千坂麻緒。西に住む誰かを想う歌として読んでみる。その人の住む街に降っていた雨が、自分を濡らしている。遠いその人と自分を雨がつなぐ。「また」というのは、雨の予報は知っていてもいつも雨具を忘れて濡れてしまうということか。あるいはあえて濡れているのか。もちろん、遠いその人を思い出してまた感情が動いてしまった、というような心情の喩としても読むことができる。

どこか遠くでわたしを濡らしていた雨がこの世へ移りこの世を濡らす。大森静佳。有名な歌だが、解釈するのは難しい。ただ、時間や空間の境界を曖昧にし、離れた場所や存在同士を結びつけるのが雨であることには、ふしぎと説得力がある。まさしく雨の歌だ、と思う。

こんな日が前世もあった傘差して鴨をみにきたある屋下がり (そのの・たろう「歌人」)

作品募集
主、戦争や募集し(ま)で受け(必着)。ます。
こちらから投稿できます